

令和6年度 第3回 千代田区立九段中等教育学校入学等あり方検討会 会議録

日時 令和6年10月17日（木）午後1時00分～午後2時30分

場所 601 会議室

【出席者】〔副委員長〕野中委員（東京学芸大学特別教授）※委員長代理

〔委 員〕池戸委員（東京都立白鷗高校附属中学校校長）

難波委員（区立小学校長会会長、九段小学校校長）

野村委員（九段中等教育学校校長）

金子委員（九段中等教育学校副校長）

清水委員（学務課長）

〔事務局〕高田学務係長、石川学務係主事、

松井九段中等教育学校経営企画室管理係長、コンサルタント1名

1 開会

野中副委員長 大森委員長が議会对応で欠席のため、委員長を代理し会議を進行する。

2 第1回・2回検討会振り返り

事務局 （資料1により説明）

野中副委員長 第2回検討会の資料に「九段中等の魅力として、保護者はキャリア教育をトップに挙げている」とあるが、具体的に九段中等のどのようなキャリア教育の取組みを挙げていたか。

野村委員 昨年までは九段自立プランがあり、キャリア教育に特化していた。企業訪問、大使館訪問等を通じて、課題研究、論文に仕上げていく。今年度からは九段探究プランに変更している。

3 入学者選抜に関する考察

事務局 （資料2により説明）

野中副委員長 本日の委員会では、これまでの委員会で積み上げてきたものを踏まえ、今後の方向性を決めていきたい。今回、具体案を提示はしないが、今後、この検討会で具体的な入学選抜の方法をまとめていくことを見据えていきたい。忌憚のないご意見をいただきたい。

池戸委員 経済産業省の未来人材ビジョンや、文部科学省の21世紀型スキル（21世紀の知識基盤社会で求められる能力）等を踏まえることは大事。事務局考察の最後の3行はすごく大事で、柱になる基本。特別枠だけでは受検者増加にはつながらない。九段中等が、こういう特別枠を設けたというメッセージで、千代田区がこれからこういうことに力を入れていくことを伝えることが大事。千代田区が、どういう生徒を育てようとしているのか。それ

があって九段中等が先頭に立ち、そういう生徒を育ていく。それがリンクして、対外的に示されることが、特別枠を設ける最初に大事なところ。そこをしっかり押さえた方が良い。千代田区が持っている教育資源をフル活用して、区はこういう生徒を育てる、だから九段中等にこういう投資をする、それが全部つながり、明確になることが大事。新しいことを始めるのか、今やっていることをさらに強めるのか。今やっているものと仮定して、特別枠でどのような入試をするのかを考える必要がある。グローバルに強みがある児童に入学してもらいたいとしたら、どんな検査があるのか。英語力、英検を持っている児童には英語で面接したり。グローバルな知見をどのくらい持っているのかを作文でみるのか。STEAMだと、何らかのコンクールで入賞したことがあるとか。STEAMに特化した適性検査をやるとか。アントレプレナーシップだと、プレゼンの場を設ける方法もある。こんな世の中になったら面白いとか。作文を書いてもらうとか。生成AIに強みがある児童に入学してもらうのは、入試がとても難しい。DXならパソコンスキルなのか。今ある九段中等の特色に合致した児童を対象に入試を実施するなら、入試の形態まで考える必要がある。プラス、その児童を、九段中等が今まで以上にバックアップして、こういうプログラム、コンテンツにより育成していきます、というところまで考えないといけない。キャリア教育のための特別枠はとても難しい。理科好き児童を対象とした特別枠を設ける際は、九段中等の新しい取組を立ち上げないといけないかもしれない。千代田区がどういう生徒を育てたいのか。だから、九段中等では、このような学びを提供していく。そうであれば、特別枠でなくても入学したいと思えるようなもの。また、特別枠で入学してもらうのであれば、どういう児童を、どういう形で選抜するのか。入学後もどう育てるのか。そこまで考えないといけない。

- 野中副委員長 池戸委員の発言は、入学者選抜は、学校から、受検生や社会に向けたメッセージであり、そのことを踏まえたものにすることが大切であるということ。つまり、九段中等をこんな学校にしたい、どんな生徒に入学して欲しいかを明示するものでありたいという趣旨と受け取りました。また、特別枠でどのような募集をしていくのかを考える際に、どう選抜して、どう育成を保障できるのか。そこまで考えないとならないという点もあります。
- 池戸委員 特別枠なので、その能力や資質を持った子で、九段中等と同等の学力や適性のある子を入れるとすると、もっともっと難しくなる。どう選抜していくかは大事になる。
- 野中副委員長 特別枠で、具体的に何を設定し、どのように選抜していくか、そのあたりの具体的な検討は次回以降となるが、難しい課題がある。東大は1学年で3100人入学しているが、そのうち100人程度が特別枠の推薦と聞いている。受験勉強のみに意を注ぐ人よりも、学校の授業の内外で自らの興味・

関心を生かして幅広く学び、広い視野や深い洞察力を真剣に獲得しようとする人を、という意図だが、ベースとして学力の基準も設定しており、共通テストで8割は取らないと駄目らしい。それがないと、授業についていけない。そこは考える必要はある。

池戸委員

九段中等の良さを、もっと活かすという方向の方が、新しいものをつくるよりは良い。こういった生徒を育てていくというメッセージが、この特別枠になると思う。今でも凄いことをやっている。

清水委員

学力は、基本伴う人を選抜すべき。特別枠を何にするかにもよるが、学力が伴わなければ、学校生活が難しい。今の区分Aと区分Bでも少し差がある。そこだけでも大変な状況にあると思う。ある程度、学力を近づけられると良い。特別枠を設けると、メッセージとして、そこに力を入れていくことを示すことになる。そこを何にするかは重要。どういう検査の内容にするのか。可能なのか、検討する必要がある。

野中副委員長

実際に、入学後の区分Aと区分Bに違いはあるのか。

野村委員

入学してからは全くわからない。区分Aは倍率2倍で、区分Bは5倍。英語は、入ってから九段イングリッシュというプログラムがあるので、そこで伸ばせば良い。例えば、英検1級や2級を取っているというのは、チャレンジしているという気持ちの方が大事。小学校の頃から、学校教育とは別に、色々なことにチャレンジしている児童が、求めている児童になる。何にでも関心、好奇心を持ち、チャレンジする児童。都立中高一貫もそれぞれ素晴らしい。それぞれ特徴があるので、自分でやりたいことができるところに行ってもらいたいと説明会では話している。入学してから合っていないということを避けたい。探究に特化しているというのは、自分で課題を設定してどう解を求めていくのか。また、未来貢献というのが、キャリア教育の部分でもある。そういう子たちを、入学してからも育む。報告書点は大事にする必要があると思う。普段の学校での学びを大事にする児童が入学できる。適性検査を別にやることは考えていない。どういう児童を求めるかは、適性検査の中身で勝負することになる。

池戸委員

STEAM、グローバル、アントレプレナーシップ等色々あるが、全てに共通していることは、興味・関心、探究心、チャレンジ意欲、小学校でこういうことを頑張ったとか、これからもこういうことを頑張っていきたいとか。特別枠で、そういう児童に入学してもらおうと、リーダーになったり、トップに立って引っ張ってくれたりする。チャレンジ枠のような形で、意欲をこんな形でみるというように、検査で特色を出す。適性とは別に、このような検査に通る児童に入学してほしいということを設定して、特別枠のメッセージにするというのも一つの方法かもしれない。1つにこだわる。スポーツに特化している児童とか、理科に特化している児童とか。チャレンジ意欲を測る特別枠もあると思う。

- 野中副委員長 九段中等では多様な教育を展開していて、それが九段中等の特色になっている。ここでは、そのような学校の経営方針や特色づくりに合わせて、入学選抜をどうしていくのかを考える必要がある。変化の時代を見据えて、どのような新たな入学選抜があり得るのか。例えば、受験勉強だけに力を注ぐだけではなく、自分の興味・関心から幅広く学んでいる、自ら探究していこうとする、そういう人材を九段中等は求める。それを土台にして、その上に、具体的にこのような生徒、という提案をしていきたい。
- 池戸委員 それをみるのが適正検査だと思う。何が特別なのかをしっかりと示さないといけない。九段中等への適性を見るものなので、九段中等からメッセージでもある。適性検査自体が。それ以外の特別枠は何なのという差別化は必要だと思う。
- 清水委員 チャレンジした経験の評価はどうするのか。色々なことをやってきた子どもたちから、限られた人数をどう選ぶのか。
- 池戸委員 それは難しい。枠を広げすぎると採点できない。比較できない。
- 清水委員 そうなると、英語なり、プログラミングなり、分野を決めずにやるというのは難しいと思う。
- 池戸委員 応募倍率を増やし過ぎないための出願条件は、しっかり決めた方が良い。体育祭で頑張りました、というようなレベルまで入ってきてしまうと、パニックになる。白鷗の特別枠であれば、全国レベルの大会に出ているとか。日本舞踊なら、これとこの発表会に出ているとか。応募者数は、毎年10人を超えない。成果物を出してもらい、コンテストで代表経験があるとか、そういう条件を付けることになる。成果物に関する面接等にしないといけない。出願のハードルはしっかり作る必要があると思う。
- 野村委員 個人の成績が大事だと思う。また、流派があるものは、全国レベルでも違うことがあるので、見極めることが大変。
- 池戸委員 コロナの時は大変だった。全国レベルの大会がなくなってしまったので、そうした基準を外して募集せざるを得なかった。事前相談で確認しながらやった。基準がないと無理。
- 野村委員 教員側が採点できるのか。外部から人を招くと、公平性の面から説明が難しくなる。そこも考えないといけない。
- 野中副委員長 大学選抜を例にとると、ある大学では、入学定員の半分以上が推薦になっている。例えば、特定の教科では、実技や受賞の評価は、実質個人の判断になることもある。数値化することに不安はある。そのために、これまで偏差値依存型の選抜が公正と考えられてきた歴史がある。
- 野村委員 剣道なら入ってから授業も部活もある。柔道はない。例えば、水泳だと個人成績になるが、スイミングスクールでだと、入ってきても部活にはでない、学校の活動を全然していませんだと難しい。他の生徒に良い影響を与える児童に入ってもらいたい。

- 野中副委員長 S S Hの例であるが、東京都立の中等教育学校で、中高でかなり高いレベルの研究をしている生徒がいた。本当に楽しんで自ら自由に研究を深めて、その成果を生かして東大に入って頑張っている。そのような、とんがった児童が入学できることは多様性を確保する点で意義があると思う。特別枠としての1つの意味がある。
- 池戸委員 大学入試も変わってきている。将来を考えると、高校時代にどういう探究をしてきたのかというのは、もっと問われることになる。学力プラスで。そうになると、探究心、好奇心の強さ、こだわりとか。そういう児童を入れることで、グローバルも、アントレプレナーシップも、生成A Iも全部網羅できる。そこを特別枠にはめて、千代田区もそういう児童を育てるために、九段中等をバックアップしていく。大々的に行政と学校が一緒になったようなP Rをしていく。
- 倍率は増えない。将来こういう社会になるので、九段中等では、こういうことをやっていく、千代田区もバックアップしていく。ひいては、こういう児童を募集する。未来志向と横のつながり、そこをしっかり出していく。ベースはそこだと思う。
- 野村委員 協調性がなくても、とがった生徒がいたら、そういう生徒がいるだけで、「アイツ、すごい」と周りが思うだけでも違う。
- 池戸委員 2～3人くらいしか入学できなくても良いと思う。ただし、そこで妥協しないで、すごい児童を選ぶ。
- 清水委員 先日、e スポーツの部活が増えているという報道を見た。それまで不登校だった生徒が活躍したりとか。
- 野村委員 e スポーツの学校ができたが、あれは特殊なので、公立だとできないと思う。
- 野中副委員長 大学くらいになると、この学生は将来伸びるなという学生が分かる。授業だけでなく全てに興味を持ち積極的に取り組もうとする、新しいものにチャレンジしようとする学生がいる。ただし、小学生や中学生では見取ることが難しいと私は思っている。何事にも自ら積極的に取り組む生徒が欲しいが、どうやって選ぶか。面接が現在最良の方法だろうが、それだけでは難しい。社会人の入社試験の視点も面白い。例えば、千代田区の試験はどんな方法で実施して、その結果はどうか、ノウハウがあるのでは。
- 池戸委員 大学でも求めるのが探究心。小学生でそういう素養を持った児童を見抜くことはできるのか。中学受験で。どんな方法でも良いが。こういう方法を取れば、そういう児童が見抜けるという方法はあるか。
- 難波委員 小学校でいうと、知識、技能よりも、人とかかわる力の方が大きい。集団の中でどうリーダーシップを発揮していくのか。そういう児童の方が伸びていくのではないか。
- 池戸委員 知識、技能を習得しようとする姿勢とは、あまり相関はないか。

難波委員 ないとは言わないが、伸びしろという意味では、そういう児童の方が、後々、お互い切磋琢磨しながら伸びていく可能性は高いと思う。

池戸委員 そういう力を入試でみるのは大変難しい。

野村委員 校長先生から推進してもらうのが一番良い。

池戸委員 研究、成果、何らかの成果物を出せる児童。1～3人くらいしかいないかもしれないが、何かにこだわっている児童を入れるというのも、一つの考えだと思う。

野中副委員長 区民枠があるのが、九段中等の一つの特徴。校長先生は一人一人の児童をよく見ている。区内の小学校とは緊密な連絡が取れるだろうから、連携して、例えば、求める生徒像に合う児童を学校長推薦してもらえるというのはどうか。

池戸委員 それはなかなか難しいと思う。

野村委員 条件として、校長の推薦は必要というのはアリだと思う。

難波委員 ある一定の基準がないと、難しいと思う。

池戸委員 推薦があっても点数化はされないと思う。

難波委員 前の会議で評価が3の児童が不合格で、2の児童が合格したことを話したが、その児童は、課外活動でミニバスケットボールに入りつつ、吹奏楽もやっていて、両立している。バスケはなかなか試合には出られない。ただ、ひたすらやっている。親と話しをすると「最後までやらせたい」と。目立たないが、根気強く粘れる児童だと思う。卒業間際に話をすると、「バスケットはやるだけのことをやりきった。また、選手としても成長しない。中学校では吹奏楽をやる」ときっぱり言っていた。そういう自己判断ができていた。そういう考え方をする児童は、もしかしたら適性検査で良い結果がでるのかもしれない。そういう部分で伸びることがあると思う。その児童が、これからどう成長していくのか見守っていきたいと思う。目立つ児童ではないが、自分を持っている。そういう児童が、これからどうなっていくのか。九段中等の校風や特徴がある。大学もAOが増えている。例えば、プレゼンで九段中等に入ってやりたいことを発表してもらおうとか。そういう選抜方法があっても良いのではないか。その児童なりの探究心が出てくると思う。一つの選抜の方法ではないか。2～3人でもとんがった児童が入ることで、6年間でどう成長するかを見てみたい。

野中副委員長 皆さんから忌憚のないご意見をいただいた。本日の議論をまとめたい。今後の本検討会の方向性として、基本的には入学者選抜に特別枠を設けるという方向でまとまったと考えます。次回以降は特別枠の具体的な中身について、引き続き検討していきたい、と考えますが、それで良いか。(特に異議なし)

最後に、特別枠の具体的なたたき台の案を作成するにあたって、皆さんから提言があれば、それをいただければと思う。

池戸委員 千代田区がどういうリソースを提供できるのか。千代田区がバックアップできなければ、区立学校がやりたいと言っても難しい。例えば、アントレプレナーシップであれば、区内の企業に声をかけてこんなことができるのか。グローバルであれば、こういうリソースがあるとか。そういうリソースを千代田区がある程度用意できれば、九段中等のやりたいことを支援できると思う。

清水委員 白鷗では、特別枠に対する東京都からのバックアップはあるのか。

池戸委員 特にバックアップはない。枠自体も既に東京都が決めたもの。

清水委員 千代田区では各中学校からの特色ある授業を提案していただき実施している。どこまで区の考え方を反映させるのかは、今の段階ではお答えできない。どこまでバックアップできるのかも、今後検討したい。また、具体的な選定方法、検査が可能か、そのところができるのか、できないのか。具体的に挙げていく必要があると思う。それを踏まえて、協議できれば良いと考えている。

金子委員 天体観望会を行っている。結構、多くの小学生が参加するが、キラキラしている。そういう児童に、九段中等はどうかと聞くと、「ちょっと、勉強の方が」と言われる。そういうキラキラしたとがった児童が特別枠で入学できると良いのかなと思う。何かに頑張って特別枠で入学した生徒が伸びて、将来科学オリンピック等に出て入賞したりとかしたら、すぐに保護者の情報ネットワークで地域に広がる。そうすると、段々、「九段中等に入ると輝ける」となる。そうなる千代田区の教育が盛り上がると思う。

野村委員 区分をどうするのか。区分に関係なくとるが、内数にせざるをえない。特別枠は、ある種のメッセージ。九段中等が求めているのは、興味・関心を持ってチャレンジする児童たち。そこには学力も含まれていて、学力も人間性も九段中等に入ってから伸ばしていくことが大事だと思う。日頃から小学校の授業を大事にしている児童を大事にしたい。学校もやりつつ、両方でできている児童、周りを巻き込める児童が良い。

難波委員 千代田区の子育て教育ビジョンを読み直そうと思った。そこには、千代田区の基本理念と目指す姿が示されている。特別枠ができて、九段中等に入って学んで卒業して良かったと、誇りを持てる生徒になってほしい。何ができたらそうなるのかは、これから考えることだと思う。

野中副委員長 特別枠を、区分A、Bで区別するのは難しい。こういう児童に入ってほしいという点は区分A、B関係なく根本にある。学校として目指す方向と、求める生徒とは関連するはずである。九段中等が取り組んでいる特色的な取組や、これまでの委員会での提案から、ダイレクトに特別枠で欲しい生徒と考え、第一にグローバル人材。第2にアスリート。剣道などが挙がっていました。一番難しいのはリーディングDX、ICT、生成AI関係。これをどう入試に取り入れていけるのか。

事務局 次回からの検討に向けて、事務局から何かありますか。
野中副委員長 特別枠を前提にこれから検討を進めたい。
事務局 これにて閉会とする。連絡事項をお願いします。
事務局 次回の検討会は、12月または1月の開催を予定しているので、あらためて日程調整したい。

4 閉会